

第6章 教育の成果

本章では、学生の学位取得状況等を把握分析するとともに、卒業・修了後の進路状況についてまとめる。また、直近の学部授業評価アンケートの調査結果にもとづいて教育効果の実情を把握すると共に、卒業生・修了生に対する意見聴取の結果からも教育研究指導の効果や成果について点検・評価を行う。

6-1. 教育方針の明示と達成状況の検証

学部・研究科ともに教育研究の目的および人材養成の目的を定め、全学生に配布する「学生便覧」「学修要覧」冒頭に掲載して明示している。またそれらの目的を達成するため、教育課程編成および実施の方針としてのカリキュラム・ポリシー及び学位授与のための到達点の目安としてのディプロマ・ポリシーも「学生便覧」「学修要覧」に示している。これらはホームページにも掲載して、周知を図っている。

これらの目的や方針の達成状況を具体的な数値などで図るのは困難であるが、卒業生、修了生の数や、主な就職先は教務掛でデータを毎年度集計し、学部ガイドブック等に掲載して、構成員の目に触れるようにしている。また達成状況の検証に向けて授業評価アンケート、卒業時アンケート等を実施している。

[分析評]

教育方針が定められ、明示されている。また卒業生・修了生データの公表およびアンケート調査を通じて、その達成状況を検証・評価するための取組が行われている。

[資料]

○農学研究科及び農学部における教育研究・人材養成に関する内規 ○農学研究科／農学部カリキュラム・ポリシー ○農学研究科／農学部ディプロマ・ポリシー ○農学部学生便覧
○農学研究科学修要覧 ○農学研究科／農学部ホームページ ○授業評価アンケート、卒業時アンケート

6-2. 学位授与の状況

第5章で述べたように、学士の学位は所定の単位数を修得したものに与えられる。過去8年間の入学生数<表 4-4>及び卒業生数<表 6-1>から算出すると、学生の95%が学位を取得して卒業している。

また修士課程における修了要件は専攻科目30単位以上を修得し、修士論文の審査に合格することと定められている。学位論文審査方法は第5章に記したとおりであり、高い水準を保つべく内容が吟味されている。学部と同様に過去8年間の修士学位取得者数を算出すると94%である<表 4-6、表 6-1>。課程制大学院の役割に則して大部分が正規の年限（2年）で課程を修了している。

博士後期課程ではさらに3年間の研究指導を受けることにより修了が認定され、論文審査

によって学位が授与される、この学位論文審査も5章に記したとおりの手順で行われ、内容がチェックされる。入学者数に対する学位取得者数（論文博士として学位取得した単位取得退学者を除く）の割合は82%である（表4-8、表6-1）。正規の年限（3年）で学位を取得する者は約50%で、正規の年限で取得できなかった者もほとんどがその後2年以内で学位を取得している。

研究活動の項で述べられている当研究科の発表学術論文のほとんどには学生の名前が共著者となっており、彼らの学位論文の内容が、学術論文の主要部分を構成する場合が多い。学術論文の多くは査読を受けており、学術雑誌の出版基準をクリアしたもののみが論文として受理されるので、水準はそこで担保されている。

研究科の研究業績は第10章で述べるように高い水準にあり、このことはその業績を支える学位論文の水準を反映するものである。全体として高いレベルの研究を遂行できていることは、すなわち教員と学生とが一体となって進める教育がすぐれた成果を挙げていることを示している。

[分析評]

適切な評価体制に基づいて内容の水準に十分配慮した学位授与が行われ、多くの学位取得者を持続的に社会に送りだしている。

[資料]

○農学部学生便覧 ○農学研究科学修要覧 ○博士学位論文取扱内規

6-3. 卒業・修了者の進路／活動状況

6-3-1. 学部卒業者の進路状況

卒業生の大部分が大学院に進学する。学部卒業で就職する学生は全体の15%程度である。就職先・職種は多様で、一定の傾向を把握しがたいところがあるが、ほとんどが定まった職に就いており社会人として活躍している。

6-3-2. 大学院修士課程修了者の進路状況

過去8年間のデータによると、ほとんどの修了生が企業等に就職し、博士課程に進学するのは19%である。就職者の職種としては企業の技術者や研究者が多い。教員になる者は比較的少ない（表6-2）。

6-3-3. 大学院博士後期課程修了者の進路状況

同じく過去8年間のデータによると、博士後期課程修了者・認定退学者の71～88%が就職し、主に博士研究員を含む研究者としての職を得ている（表6-3）。また、修了者の11%は修了時に教員職を得た結果となっている。

[分析評]

学部卒業生の多くがさらに専門領域の深い知識を得るために大学院修士課程に進学し、修士課程、博士後期課程で研鑽を積んだ後、主に研究者、技術者として社会で活動している。人材養成の目的を実現できており、満足のいく成果が挙げられている。

6-4. 在学生への授業アンケート調査と結果

学期ごとに実施している学部授業評価アンケート（検証・改革のため、平成24～25年度は一時的に中断した）によれば、多くの学生が授業で知的に刺激され、授業が自分の学習にとって有益であったと回答している。実際、専門科目の講義が中心となる2、3年次生の配当科目を対象とした平成22年度の結果を23年度に解析した結果<図6-1>では、アンケート対象数が最も多い「講義科目」においては63～65%が「内容が理解できた」、71～78%が「準備され、体系的であった」、73～83%が「教員の熱意を感じた」、75～81%が「自分の学修に有益であった」と答え、その比率は2年次生よりも3年次生で高くなった。これらの値は、実験・実習科目ではより高い数字を示していた。ただし「授業のために自主的に学習した時間」に対する回答は全般的に短く、自学自習を尊重する本学の方針が十分に学生に浸透していない傾向が見受けられる。

平成22年度学部教務委員会での検証により、平成23年度実施の学部授業評価アンケートは各講義担当者には集計結果を返して検討資料として活用するものの、学部全体の報告書としてはまとめない事とした。委員会での検討は、平成24年度以降のアンケート実施体制の見直し（全学が開発中のWebシステムプログラム利用など）を中心に行われた。

[分析評]

全般に学生の授業に対する満足度は高く、特に実験実習科目は高く評価されている。カリキュラム・ポリシーに掲げる項目のうち「実験、実習を特に重視する」姿勢が成果を挙げている。本学の教育の基本理念として「対話を根幹とした自学自習を促す」ことを挙げているにもかかわらず自主的に学習する時間が短く、学生に自学自習の態度があまり身につけていないのは、理念の実現という観点からの成果が十分に挙げられていないことを示している。今後は、積極的に自主学習を促すような指導の徹底と、Semesterあたりの修得単位制限の設置などの可能性も含む改善が必要である。

[資料]

○平成22年度授業評価アンケート報告書 ○平成26年度授業評価アンケート結果の例<図6-2>

6-5. 修了生へのアンケート調査／意見聴取と結果

平成23～25年度大学院修了生に対して修了時に実施したアンケート調査の結果<図5-1>によると、教育に関するいずれの項目についても満足度は概ね高かった。特に学位論文の指導

体制については 89～90%が「十分に満足している」あるいは「満足している」と回答している。研究指導は、いずれの専攻においても重視しているところであり、好ましい結果と言える。

[分析評]

アンケート結果により、学生の主要な部分を占める大学院の教育内容に対する満足度は高いことが明らかとなった。本研究科が目的とする優秀な技術者、研究者、高度な専門家等の育成に関して、満足のいく成果が挙げられている。

[資料]

○農学研究科修了時アンケート用紙

6-6. 前回の外部評価における主なご指摘とその対応

○学士取得率が 95%、修士学位取得率が 94%、学位取得率が 86%（3年間での取得率 50%）と極めて高いが、反面、内実が理解できないものの、米国等の大学に比べ学士、修士の取得率が高すぎることによるレベルの低下懸念を払拭する取り組みが必要かも知れない。

前回の外部評価では、高い学位取得率（学士と修士）による学位論文の質の低下の懸念がご指摘されている。大学院は「課程制大学院の本来の役割として、厳格な成績評価と適切な研究指導により標準修業年限内に円滑に学位を授与することのできる体制を整備すること」が求められている（中央教育審議会・大学分科会・大学院部会）。これに沿うように、本研究科では、適切な研究指導を行っており、学位の質を確保しつつ審査学位取得率が高い水準にある。研究科の研究業績は第 10 章で述べるように高い水準にあり、このことはその業績を支える学位論文の水準を反映するものである。また、大学院に平成 26 年度から導入される主指導・副指導教員制度の導入によってさらに高い質保証が示されるであろう

○学生の英会話力の向上などへの一層の取り組みが必要であろう。

○英語力の低迷状況は学部時代からの影響も大きい。

短期交流留学制度（アルバータ大学や UC デービス校、シドニー大学、オーストラリア国立大学等への派遣）の実施や科学英語科目の開講などを実施するとともに、TOEFL 受験を支援するための e-learning システムの開設を行ってきた。また、平成 26 年度から全学レベルで実施される新入生全員の TOEFL-ITP 受験に、農学部は積極的に参加する。

○英語論文作成については、ネイティブの教員ないしチェックをしてくれる要因が不可欠であり、短期・中期の客員等だけでなく、外国人の若手を助教、准教授等として採用することも考えるべきであろう。また、発表を英語でするような訓練も積極的にとりいれてはどうか。

オーストラリア出身の教員を研究科常勤准教授として採用し、他の非常勤教員（外国籍）とともに複数の英語講義を開講している。また、客員教授として長く滞在したカナダ出身の研究者が、英語論文の執筆方法に関する講義を複数年にわたって開設した。

<表 6-1> 学部および大学院における学位授与数

	学士	修士	博士 (課程修了)	博士 (論文提出)
前期平均	303.3	290.3	53.7	22.7
今期平均	310.3	282.7	63.0	15.3
H23 年度	319	286	64	20
H24 年度	300	281	64	14
H25 年度	312	281	61	12
定員	300	263	120	—

<表 6-2> 大学院修士課程修了者の進路状況

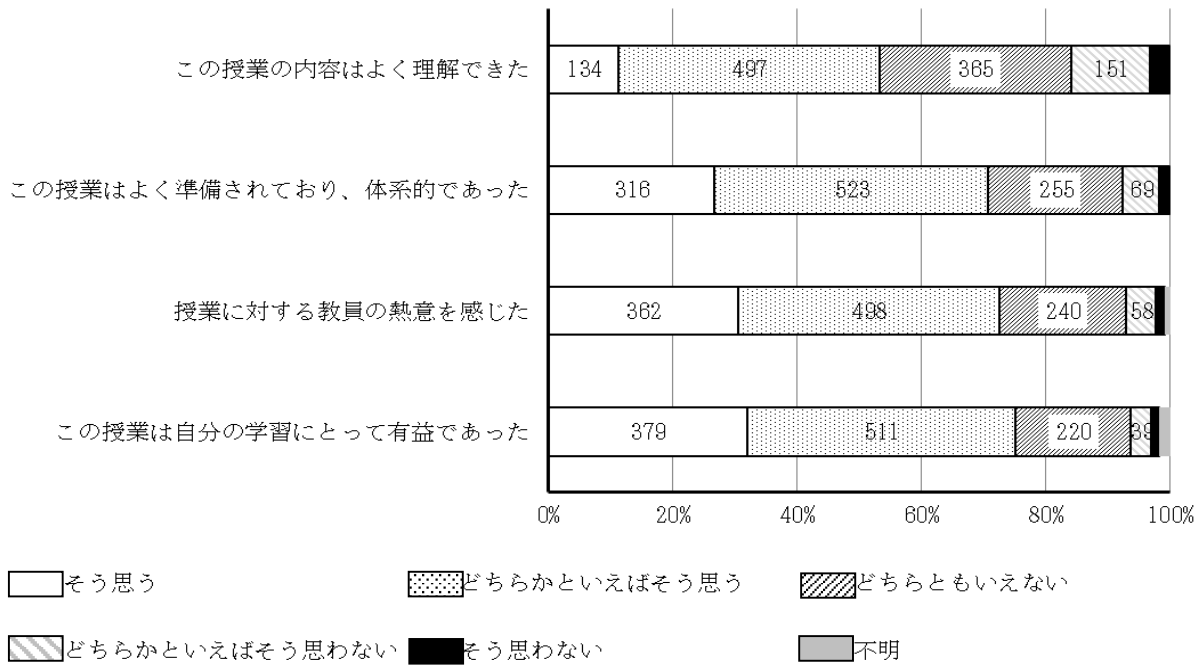
	修了者	進学	就職	その他	就職先			
					研究者	技術者	教員	その他
前期平均	290.3	54.3	222.0	14.0	59.3	103.0	4.0	55.7
今期平均	282.7	49.7	219.3	13.7	48.3	98.0	2.0	71.0
H23 年度	286	54	220	12	54	97	2	67
H24 年度	281	42	218	21	50	95	2	71
H25 年度	281	53	220	8	41	102	2	75

<表 6-3> 大学院博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路状況

	修了者	進学 ¹⁾	就職	その他	就職先			
					研究者 ²⁾	技術者	教員	その他
前期平均	66.3	4.7	55.0 (57.7%)	6.7	39.3	7.3	7.0	1.3
今期平均	72.7	4.7	54.3 (74.4%)	13.7	34.3	6.0	10.3	3.7
H23 年度	83	7	61 (73%)	15	35	3	17	6
H24 年度	65	3	52 (80%)	10	37	8	4	3
H25 年度	70	4	50 (71%)	16	31	7	10	2

¹⁾ 研修員等、²⁾ 博士研究員 (PD) を含む

2年次生（延べ1,184名）



3年次生（延べ1,992名）

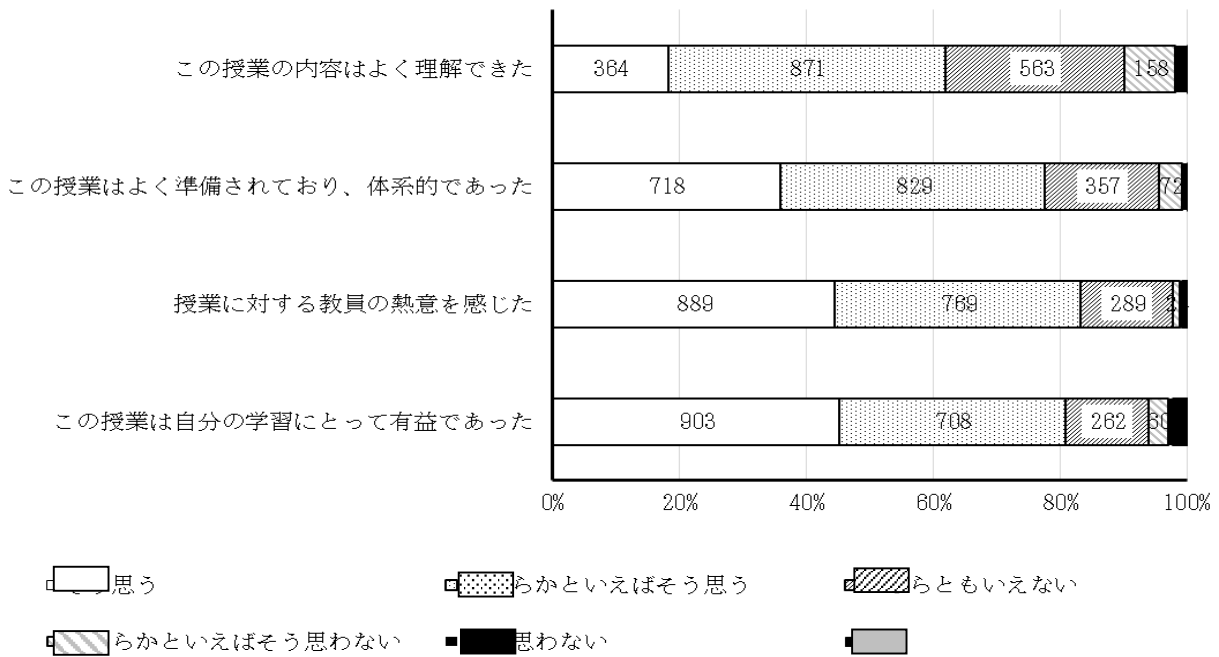
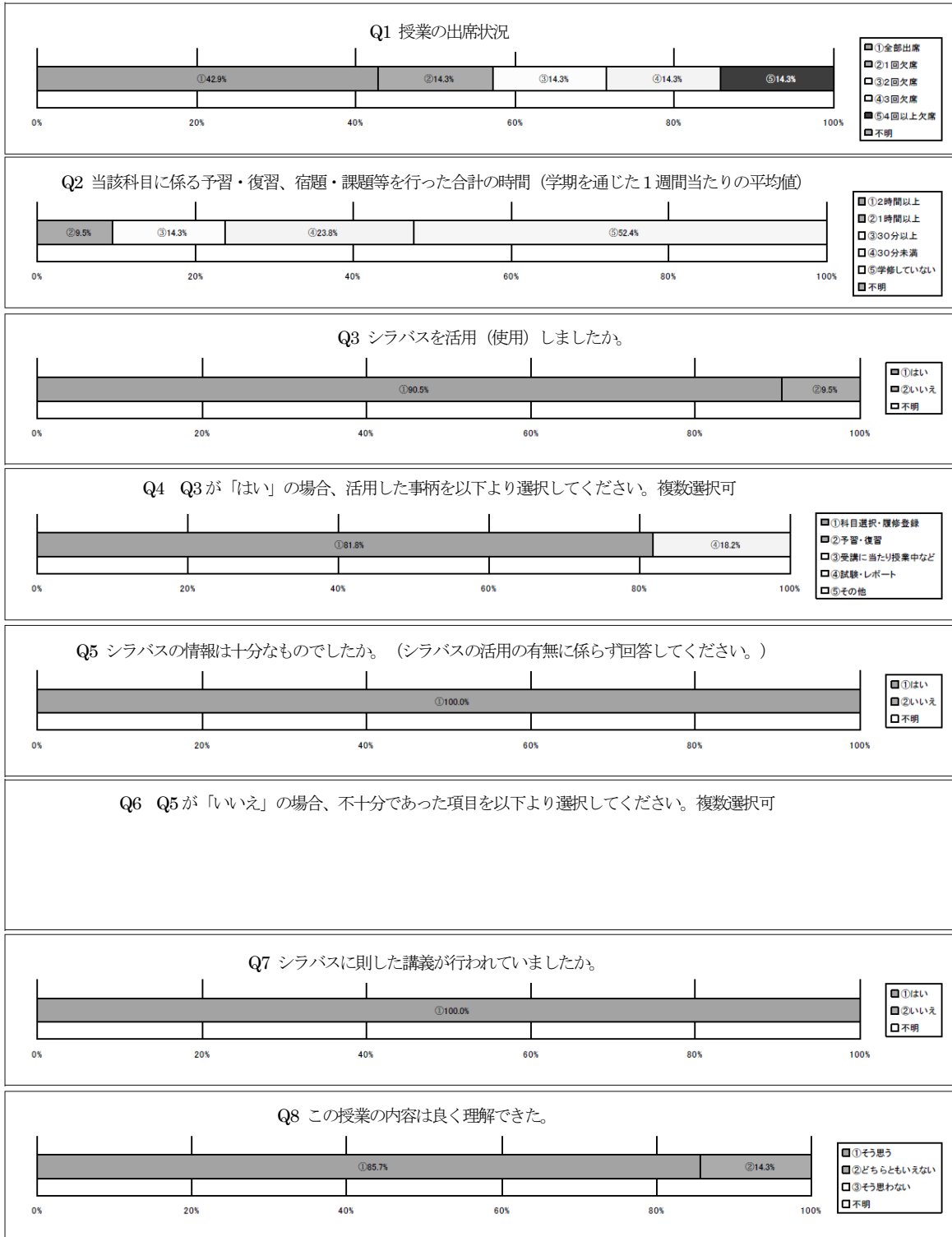


図 6-1 在学生への授業アンケート調査結果（一部抜粋）



〈図 6-2〉 平成 26 年度授業アンケート結果の例
 続く

